

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	野橋 : 文苑
Author(s)	錦村
Citation	龍南會雜誌, 105: 20-27
Issue date	1904-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5668">http://hdl.handle.net/2298/5668</a>
Right	

## 野 橋

錦

村

銀杏城を北へ距る六里、名も知られぬ平和の小村がある。村外れには庚申塚があつて、塚の上にはこの村の父と仰がるゝ一本の老杉が雲を凌いでツツ立つて居る。譬へば巨人が天を睨んで立てるかのやう、幾百年の風雨に暴された太古の姿、苔さび根株張りて、鬱蒼たるその威容は、いかにもこの村を支配すべき『崇高』の面影を宿してゐる。今しもこの小村を通り過ぎて、庚申塚の前に出でたるわれは、その毅然たる面影に對して、崇敬の情を拂はずには居られなかつた。

麗らかな春の日和。花といふあらゆる花の花粉を取つて、若草萌ゆる緑の野に篩ひ落したやうに、熊本街道の右と左とに横がつてゐる田圃を、同じ色に染め出した菜種の花は今が盛り。幾十町とも限り知られぬ菜種畑の向ふには、薄紫の衣を纏うてゐる鞍馬岳が、嫣然と霞の間から笑みを漏らし、勝利者の冠に輝く金鷄のそれにも似たる春の日の光を浴びて居る。

田畑の畔、森の影、村の人家、薄靄の中に點々として一幅の畫をひろげ、十里の山村水郭、さながら靜かなる湖の如くである。、停車場へ通ふ三臺の馬車が、木槿垣に沿うた路上の土畑を煽つて、け

なましく過ぎ去つた跡には、横頬冠の眼のきよろりとした鼻の高い田舎老爺が、何やら獨りごちて行くのと、どんよりと霞む空の間から、雲雀の聲が聞ゆる計り、靜かなる田舎の午は再びもとの寂寞に歸つた。

庚申塚から凡そ十丁計り、滑らかな街道が少しづつ勾配をもつて、やゝ高まつた處に、一條の野水が、眞綿を引きはねたやうな雲影を宿しながら、街道と十字形をなして流れてゐる。その川の名は何といふやら、もとより川幅も五間に足るか足らぬ位なので、春の歌に耳を傾けぬ里人は、殊にこの川に名づけなかつたらしい。

たゞもう一條の名無川、水は奇麗に澄み渡つて、白い小石が基石を並べたやうに、透き徹つて見えてゐる。川の邊りには一本の柳が青々と芽を吹いて、淋しげに風に靡いてゐる。ついこの間まで架けられて居た危い土橋が、今は立派な木造の橋と成つて、塗り立てのペンキの惡臭が鼻をつくやう、白文字で『見返橋』と橋の名まで鮮明に鐫られてゐる。

で里人にはその謂れを聞くと、いかにも詩趣のある面白い話である。と云ふのは、この邊りは街道のうちでも殊に眺望の佳い處で、橋の上から眺めると、村の右手は山又山で、左の方は扇のやうに擴かつて居る沃野十里、朝の雲、夕の雨、四季さまざまの變態は、さながら一幅のパノラマを展開したかのやう、始めて此處を通る旅人は、誰れもこの橋で、もと來た道を振り返つて、其景色を愛づる所から、かくは名づけたのであるやうな。

今しも陽春の光に酔うて、歩むともなく足を連んでゐるわれは、いつしか空想のうちより醒めて、

あゝこの橋ころ、わが爲めには紀念の橋であるのだ。果てしもなく青春の幻影を追ひ、理想の園に甘き葡萄の香を慕ひつゝ、この橋に立ちて落日を觀たのも幾度であつたらふ。半世の苦闘をつゞけたるわが船の舵は既に折れ、舷は人生の風波に破れもやする。今や十里にひろがりたる野に現せし空想の殿堂、いつしかに毀たれ、渴仰の愛の泉のやがて涸れんどせるわれは、再び橋上に春日の影を仰いで、十年前の過去の幼い記憶を喚び起すのであつた。

春の空は一面に、ひんやりと曇つて、ろよとの風もなく、橋の袂の一本柳は、壓へられたやうに霏の底に眠つてゐる。村につゞく麥畑、笠の如き小山、見渡す限り、鈍色の雨雲低く垂れ、川上に建てられてゐる水車の音のみが重くるしく聞える。牛を追うて今しがた通りかゝるつた老爺は『どうやら雨になりそうな』と呟いて行つた。

風なきに散る緋桃の花幾片、何處よりか清香を齎らして、さながら酔ゆるが如き春心地。僅かに小學を卒したわれは、これから笈を負うて學海に棹さむとするのである。今まで風もなく波もない家庭の港に繋いで居た小舟を、怒濤渦巻く荒海に乗り出さうといふのた者、これを生涯の一轉機と言はいで何と言はふ。然り確かに生涯に轉機を劃するのである。孔子魯をいつる遅々たりとか。まことに郷里を出づるとき、言ひしらぬ感慨の犇々と胸に迫るを覺えたわれ、慈愛の泉、慰樂の源ともいふ可きわが家の影の靄の幕に消え去つたときの思、鉛の如くわか胸を壓する悲しさに、頼みに語も出なかつたのである。あゝ別離の情いかなればかくは辛き。われはこの橋を限りに、年をるむつみし懐しの友と、再び袂を分たねばならぬ!!

渠とわれとは郷里を同じくして、これまで同じ境遇の下に生ひ立つたのである。渠はその村きつての長者と謠はれし大家の一人息子、その邸宅は一生の數奇を凝して建築せられたので、田圃の中の一筋路を通つて、稍々小高い阜の上、裏手は丘續きの小松原、前は濶然と開いた田畝を叩へ、四方白壁の練塀を回らし、鬱蒼と茂つた山毛榉や榎樹の間に隠見してゐる。かゝる大家に生れ乍らも渠は郷黨に誇るの風露だになく、正直な惻恰な活潑な子で、學校にても、家庭にても、常に讃められものになつてゐた。その上に家産はあるし、軀驅は壯健だし、何一つ不自由なき身、渠が前途には幸運の星が渠を招いてゐたのであるが、さるにても人の世の命運は計り難いもの、去年の冬から、當代の主人が手出した事業の失敗で、數万の積財一朝に傾きかけたので、渠は傾ける大家を双肩に擔うて、中興の大責任を帯びたのである。あゝ水の流れと人の行末は、斯くまでも計り難いものであら

ふか。残念なる運命の斧は渠が空想の殿堂を毀ち。慰樂の泉を斷つて了つたのである。かくて三春の行樂を集めし槿花一朝の夢は忽ちに醒めて、今や渠の眼は空想の幻影を追ふ可く旨に、渠の耳は慰樂の聲を聞く可く聾となつたではないか。命運を果敢なんだ渠の眼は窪みて悲みの露を宿し、頬は瘦せて憂の色を帯びてゐるではないか。

われは友の命運を悲しみ、友は別離の情に堪へで、二人は黙つて唯うつむいてゐる。飛びつかれたのであらう、一匹の蝴蝶がひら／＼と落ちるやうに脚下の堇の花に止つた。

幾町となく割つた田圃の向ふには、日曜にいつも釣を垂れたいさゝ小川や、お正月に村の大勢の子供と左儀長をした丘や、學校の歸りに喧嘩をしてはさん／＼に叱られた嬢さんの家や、山川草木それぞれ過去の歴史を印して、薄靄の中にぼんやりと見えてゐる。

二三羽の鴉が頓狂聲して、はんのりと一刷毛、薄紅潮せる卵色の雲が棚曳ける向ひの雜木林に鳴いて行つたので、ふとわれに返れば、春の暑影もいつしかに傾いてわれをうながすかのやう、われはつと立ち上つた。

友は泪に濕はへる眼をしばた／＼いて、郷里に残つて家業を勉めること、家運を挽回せねば止まぬと決心せることなどを告げ、わが前途に幸多かれと祈つた。われは唯もう夢幻の境を彷徨ふかのやう、友の兩手を鼻と握り緊めた。暖い友愛の血は頓みに五臓を流れて、心臓の鼓動堪へがたく、熱き潮は潜然と頬を傳うて流れ下る。

唯もう夢である。星海に掉さす初陣の旅立に涙を流してはと、いくら忍んで見ても、再び頬を傳う

て流れる始末、何故であらふ？

われは思い切つて、さよなら――

友も聲高く、さよなら――

さらばの聲は友とわれとを、『過去』『未來』に架け渡した時の橋より東西に分つて、歩むともなく夢幻の境を辿らしむるのである。彼十歩、吾十歩、われ振り返れば友も亦ふり返り、友呼べはわれ亦答へ、二人の距離がやうく遠ざかつて、渠が姿の靄の中に消えんとしたる時、われは再び帽を振りて戀しき友の名を呼んだ。けれども渠は恐らくは氣づかなかたのであらふ、見返らうとも爲なかつた。唯見れば友の姿も、橋の柳も、みな靄のうちに包まれて、夢のやうに漂うてゐる。

仕事を終へて歸るのであらふ。如何にも牙はた張りのある唄の節の、薄靄の空を消え行くのを聞いては、さすがに茫然立ち止るのである。次第に遠ざかる唄の調子にふり返つ時には、もはや友の姿も、稿の柳も、庚申塚の杉も、すべて靄の中に消えてしまつた。

野面を吹く風のひやりとわが頬を撫づるに、驚いてわれに歸れば、萬象ひそめる夕闇の底に、一步步、疲れたる黙想の歩調を續くるのであつた。

無象の翼を伸べて、虚空を翔り行く時の流疾く、幾度かこの世の春は回つて、かの思出の橋に行んだのも十年の一昔。さても友愛の泪にくれて別離を悲んだわが友は、如何になつたのであらふ。別れてから四五年の間は、時折の魚信雁便に、問ひもし問はれもしたのであるが、夫れから以後、渠

文

の消息はうち絶へた。郷里の噂では家人を伴れて、四五年前遠國に赴いたとのこと。渠が何等の消息をもせずに國を出たのは、恐らくは志を遂げてから知らせん爲めであらう。渠が不斷の精勵と艱苦とは遂に酬われなかつたか。渠が流す苦辛の汗は遂に家運の衰類を支ふるに足らなかつたか。あゝ矢は折れ弦はすでに斷れた。われは再び渠と相逢ふの日がないであらうか？

今もなほ黙々として、見返橋のほとりに立つてゐる石地藏——運命の轉變に眼をくれぬ石地藏は、更らに過去の歴史を語らふともせぬ。あはれ菜花の間を縫うて、白金の蛇のやうにうねるいさゝ小川のやがては消えむ霞の奥、流れの末は人力のいかで計り知られやうぞ。運命の神が迫害の鞭をあげて毀つ幻の殿堂は、渠自らが築いたのではないか。黄、白、赤、黒、三千世界の物象に異なる光をなぐる運命の星の照らす所、其處に浮世の春はめぐるであらふ。虚空澄然、色もない香もない天上の園其處に光榮の花開き、祝福の泉は湧くであらふ。

あゝ十年前のわれ、十年後の吾、彼と此とに架け渡す時の橋は、再びわが最愛の友と此處に立つことを許さぬのである。水よ、流れよ、流れて永遠の過去に合せよ、風よ、吹け、吹いて無窮の蒼穹に入れ。われは再び渠が友愛の泉を汲み、慰藉の聲を聞くことが出来ないのだ。

慈愛の化身に似たる春の日は、卵色の雲の間から、金鷄の光を蒼穹に放ちて、懐しき郷土の山川を、無限の繪巾の上に書き出した。

天上の光、地上の影、昏然として酔ゆるが如き萬象の中に、われを慰むるものは、實に毅然たる老杉の威容である。

苑



想ふ、十年の昔、橋上の渠とわれは恐らくば運命の分水嶺に立つてゐたのであらう!! 「をばり」

新體詩

旭 光

たとへばそれようら若き  
母の乳房をだきしめて  
ちの香に酔へる子の瞳  
静に夢に入るがごと

寂しき光沖の上に  
やゝに消ゆゆく星の影  
またさめ出でひあけぼのゝ  
樂しき光もだしつゝ

はてなき空ゆ流れては  
いまし下界の岸うちて  
無限をさどす浪の音に  
朝の聲のこもるかな

天 山

見よ海原の深緑  
戀の光の燃ゆるめし  
崇高き聖の御胸や  
五彩色どるあやのかけ

北にめぐれる紅は  
春の夜の夢雨は  
迷の色のとひらさき  
こやみねそめし裾模様

さびしくされど聲もなき  
みことかしてみ夜の魔は  
暗と眠と西のそら  
諸共領をひきしんぬ